



小学校における英語活動の推進をめざして —英語活動の調査と資料提供を通して—

糸満市立潮平小学校教諭 大城 由美子

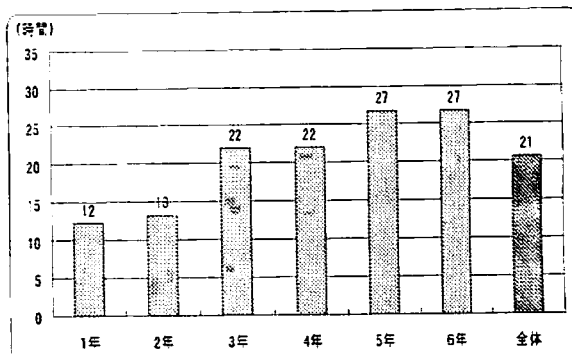
1 研究のねらい

小学校英語の必修化に向けて着実な準備が求められる中、指定研究の方針と年次計画に基づいて、管内小学校学級担任に英語教育に関する意識・実態調査を行い、結果の分析と理論研究から、啓発資料を作成する。そこから、学級担任の英語活動への積極的な関わり、各学校における英語活動の取組の充実をめざす。

2 研究の特徴

実態調査

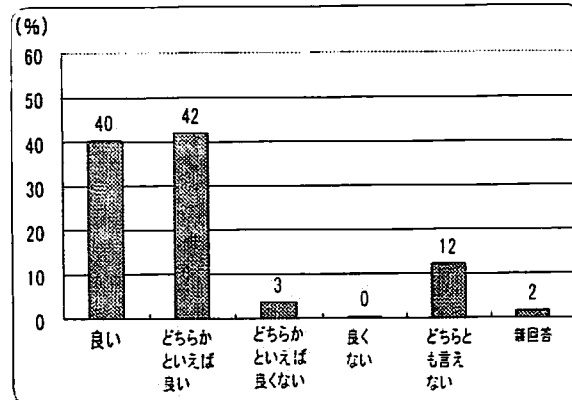
- ・学校間に差はあるものの、年間平均 21 時間、英語活動に取り組んでいる。
- ・約 80% の教師が英語活動を肯定的に受け止め、ALT と共に授業に関わりを持っている。
- ・指導法の習得やカリキュラム、英語力の向上を必要としている。
- ・英語活動部としての取組が弱い。



学年ごと年間指導時数 (40 校)

校内体制の充実

- ・英語活動部を中心とした校内体制の充実に努める。
- ・校内研修により、担任が授業へ積極的関わりがもてるような授業作りの提案をする必要がある。

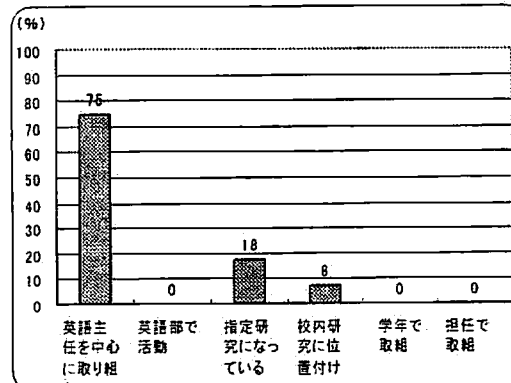


英語活動をどう思うか (231 人)

3 結 論

今回の研究で、管内の小学校英語活動の実施状況と教師の意識について知ることができ、英語活動推進にあたっての課題が明らかになり、推進に向けての具体策がみえた。

英語活動を肯定的に受け止めていることから、英語活動の取組へのお互いの意識、周りの環境を整えれば、英語活動推進につながると考える。



校内体制 (40 校)

小学校における英語活動の推進をめざして

—英語活動の調査と資料提供を通して—

糸満市立潮平小学校 大城由美子

I テーマ設定の理由

グロ
ー
バル
化

グローバル化が進展する中、平成14年に打ち出された沖縄振興計画によると、国際化に対応し得る人材育成・確保のために英語を中心とした外国語が堪能な人材の育成を図ると示されている。また、国際交流・協力に対する啓発に努めるとともに積極的に県民の英語力の向上を図ることや、小学校における英語活動の積極的導入、語学力を備えた児童生徒の育成に努めることを推進すると掲げている。本県では、外国語で外国の人々とコミュニケーションできる人材の育成が求められている。

英 語 の
必要性

相手の意見や考えを聞き、自分の考えや意見を積極的に伝える気持ちを育てることや、日常生活に関わりの深い、簡単な英語を使い、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度の育成は重要である。また、言語習得に柔軟とされる小学校の早期の時期に、英語に慣れ親しませることは、異文化理解教育とともに英語習得の重要な基盤作りになると考えられる。そういう意味において、平成14年から行われている「総合的な学習の時間」においての、国際理解の一環としての英語活動は大きな意義がある。

必修化へ
の動き

さらに、小学校英語がこれからは必修化される話し合いがなされており、必修化に向けての着実な準備が求められる中、各学校においては英語活動の取組を充実する必要がある。

管内の
実態

島尻管内の小学校でも、「総合的な学習の時間」で英語活動が行われているが、研究開発地区、研究特区の取組やその他の地区の実践と比較して、本地区の英語活動は十分と言えない。また、これまでの赴任校や近隣校の英語活動の実施状況をみても、取組等に大きな差があると思われる。本地区の英語活動推進・充実のためには、英語活動に取り組む校内体制の整備や英語活動の重要性、ねらいを全教員が認識し積極的に関わろうとする意識の高揚が必要である。

実態調査の
必要性

そこで本研究では、島尻管内の課題を明確にするためにも、英語活動の実施状況、担任の意識やニーズ、校内での取組を知るための調査を実施し、詳しい実態を把握する。そして、小学校英語の必要性、重要性を明確にしながら校内体制づくり、授業の進め方について理論研究をする。研究の成果は、リーフレット形式でもまとめ、英語活動に関わる教師の意識を高める資料として各学校に提供する。そこから、各学校での英語活動部を中心とした英語活動の年間計画作成や指導に関わる校内体制のあり方、担任の積極的な関わりを図ることにつなげたい。

理論研究と
資料提供の
必要性

以上のことから、英語活動の実態把握調査と各学校への資料提供により、英語教育の必要性和校内体制のあり方や担任の積極的関わりの重要性を明確にすることが、英語活動の推進につながるのではないかと考え本テーマを設定した。

II 目的と計画

1 目的

英語教育の必要性が高まる中、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するために、指定研究の方針と年次計画に基づいて、管内小学校学級担任に英語教育に関する意識・実態調査を行い、結果の分析と理論研究から、啓発資料を作成して、学級担任の英語教育への意識の高揚を目指す。

- 2 研究計画 ① 管内小学校教員の英語教育に関する意識・実態調査の実施
 ② 調査結果及び課題の分析
 ③ 英語活動のねらいや推進のための体制づくり、授業作りを中心とした理論研究
 ④ 英語活動啓発資料の作成

Ⅲ 研究内容

理論研究に関しては、文部科学省『小学校英語活動実践の手引き』（2001年）、沖縄県教育庁義務教育課『小学校英語活動指導資料・実践例「レインボープログラム」』（2004年）を参考にまとめた。

1 英語活動について

(1) 英語活動導入の背景

国際社会

世界の国々が政治、経済、文化、スポーツの面で相互依存関係を深め、国際化が一層進化する激しい時代の中、これらの社会に応じて、子供がこれから先、国際社会の中で生きていくために国際感覚の育成が必要となっている。

沖縄振興計画

特に沖縄県では、平成14年に発表された10か年の計画期間とする「沖縄振興計画」でも次のように語学力・英語力の向上を掲げている。

○国際交流・協力の推進	・交際化に対応し得る人材を育成・確保する。 ・英語を中心とした外国語が堪能な人材を育成する。 ・積極的に県民の英語力の向上を図る。
○初等中等教育の充実	ア 学力向上対策の推進 ・外国人とも分け隔てなく接することのできるコミュニケーション能力の育成を図る。 ・小学校における英語活動の積極的導入等、語学力を備えた児童生徒の育成に努める。

総合的な学習の時間での国際理解に関する学習

学校においては、これらの変化に迅速に対応する教育の必要性が高まり、「生きる力」を培うことを基本的なねらいとして、平成14年「総合的な学習の時間」が創設された。「総合的な学習の時間」での学習活動の一つに「国際理解」も示されている。国際理解に関する学習を行うに当たっての留意事項として、次の3点があげられた。

- ① 異文化理解と共生
- ② 日本人として個人としての自己の確立
- ③ 外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成

外国語会話

そして、国際理解教育を進める具体的な学習活動として構成図（図1）に示す通りである。これらの活動は相互に関連を図りながら取り上げることが望まれる。つまり、「外国語会話」は国際理解に関する学習の一環として行われる。

英語活動

「外国語会話」とは、諸外国の様々な言葉を使った意思疎通を図るための会話である。現在、世界の多くの場面で使用されて言語であることや子どもが学習する際の負担等を考慮し、「英語」を取りあげることとしたと述べている。

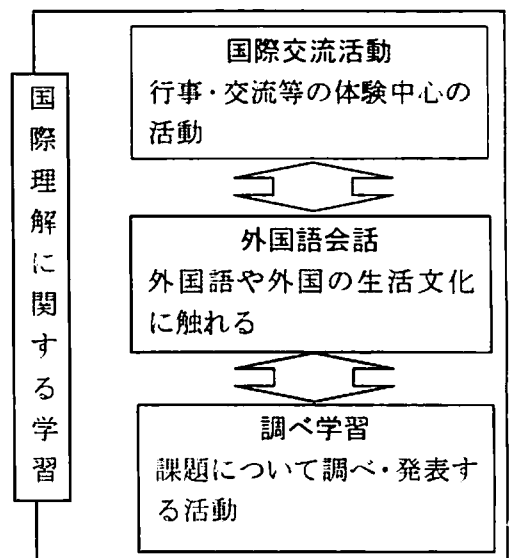


図1 国際理解に関する学習の構成図

「総合的な学習の時間」で扱う英会話を体験的な活動を中心に構成されることから「英

語活動」としている。

文部科学省『小学校英語活動実践の手引き』によると、国際理解に関する学習の一環としての英語活動の趣旨は次の2点に要約される。

ア 外国語に触れる。

イ 外国の生活や文化に慣れ親しむ。

小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすることと示されている。これらの趣旨を踏まえ英語活動のねらいを以下に示す。

(2) 英語活動のねらい

沖縄県では、平成 15 年度に出された『レインボープログラム』において、英語活動のねらいを次のように掲げている。

① 英語でコミュニケーションを図ろうとする態度をはぐくむ。

- ・相手の意見や考えを聞き、自分の考えや意見を積極的に伝える気持ちを育てる。
- ・日常生活に関わりの深い、簡単な英語を使い、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

② 違いを認め、他の人々と協調していける豊かな心をはぐくむ。

- ・異なる考えや意見を受け入れ、他の人々と協力することができる心を育成する。
- ・新しい物事や考え方に柔軟に対応できる寛容性を育成する。

③ 自国の文化や他国の文化を理解し、それらを尊重する態度をはぐくむ。

- ・日本の文化や地域の伝統文化等に興味・関心を持ち、それらを大切にする態度を育成する。
- ・外国の文化や歴史に興味・関心をもち、尊重する態度を育成する。

また、文部科学省『小学校英語活動実践の手引き』によると、児童期は、新たな事象に関する興味・関心が強く、言語をはじめとして、異文化に関しても自然に受け入れられる時期であるため、このような時期に英語に触れることはコミュニケーション能力を育てる上でも、国際理解を深める上でも大変重要な体験になると示されている。

(3) 先進校の取組から

本県では、英語活動のねらい達成のために、既に早くから取り組んでいる学校がある。その一例として那覇市の取組の成果を紹介する。

平成 15 年から 3 年計画で文部科学省研究開発校に指定された那覇市の報告書によると、音声言語の面からも児童期は聴覚器官が敏感であり、母語の干渉をうけにくく、この時期が英語学習の適時であると考えられると述べている。

このことは、那覇市内の児童の追跡調査結果からうかがえ、報告書によると、本調査は、小学校英語学習で育まれたスキル面（聞き取り力）の習得度としてとらえることができ、「英語を聞く・話す」の音声中心の小学校からの英語教育の成果であると考えられると述べている。これまでの研究開発学校からも、技能面での成果についてのデータが示されてこなかったことを考えると、那覇市でリスニングテストによって技能面での成果の評価が実施されたことは注目される。このことから、小学校の早期に英語に慣れ親しませることが英語習得の基盤作りになると思われる（表1）。

表 1 那覇市内の実用英語検定5級程度のリスニングテスト結果(正答率 %)

小学校6年時の 英語学習指導形態	45分授業で週 1回実施	30分・15分授業 で週2回実施	45分授業で週 2回実施	(平均)
中学入学年				
平成16年入学 1年生(497人) 小学校で1年間英語教育を受けた	62.0	63.4	61.2	62.5
平成17年入学 1年生(3200人) 小学校で2年間英語教育を受けた	71.0	75.0	78.0	74.7

2 島尻管内英語活動の調査より

(1) 調査の概要

- 調査の目的 英語活動が必修化として導入されることが予想され、それを見据えて、管内の英語活動について、実施状況や教師の意識などを把握するとともに、課題を明らかにすることにより、今後の推進に役立てるための基礎資料を得ることを目的とする。
- 調査テーマ 小学校における英語活動実態調査
- 調査方法 質問紙法（アンケート）
- 調査期間 アンケート用紙配布（郵送） 平成 19 年 5 月 16 日
記入及び提出期間 平成 19 年 5 月 21 日（月）～5 月 25 日（金）
- 調査対象 島尻管内全小学校 42 校の 252 学年
- 調査項目 年間指導時数/A L T 年間指導時数/指導者/担任の役目/活動内容/教材制作者/英語活動に対する意識/活動にあたって必要としていること/校内体制/校内研修予定/校内研修内容/英語への関心

●回収率

	調査数	回収数	回収率
管内全小学校	42 校	40 校	95.2%
1 学年	42 学年	38 学年	90.4%
2 学年	42 学年	37 学年	88.0%
3 学年	42 学年	39 学年	92.8%
4 学年	42 学年	38 学年	90.4%
5 学年	42 学年	40 学年	95.2%
6 学年	42 学年	39 学年	92.8%
合 計	252 学年	231 学年	91.6%

(2) 調査結果・分析

① 英語活動時数

管内 1 校あたりの年間指導時数は平均 21 時間である。度数分布でみると、学校間に差がみられる。

Q あなたの学級では、年に何時間英語活動を行う予定ですか。

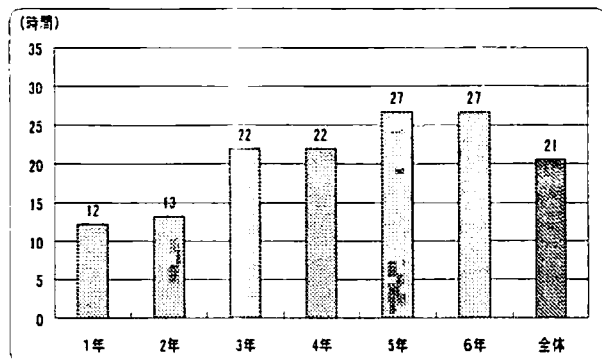


図 2-1 学年ごと年間指導時数(40 校)

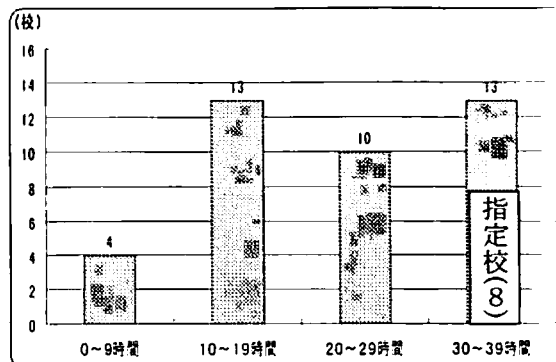


図 2-2 年間指導時数と学校数 (40 校)

- 管内 1 校あたりの年間指導時数は平均 21 時間である（図 2-1）が、度数分布で学校ごとにみると（図 2-2）、10 時間台の学校、20 時間台の学校、30 時間台の学校とやや均等に分かれ、学校間に差がみられる。
- 0～9 時間の学校も 4 校あり（図 2-2）、又最低時数学校は 5 時間とかなり低いのに対して、最高時数学校は 36 時間と、学校間に差がある。
- 学年ごとに平均時数をみると（図 2-1）、中高学年は 20 時間台であるのに対し、低学年は 12.3 時間である。また、年間 0 時間の学年も 5 学年ある。

② ALTによる指導時数

管内1校あたりのALTによる年間指導時数は平均19時間である。年間指導時数と同じように、学校間に差がみられる。

Q あなたの学級では、年に何時間くらいALTやJTEが指導する予定ですか。

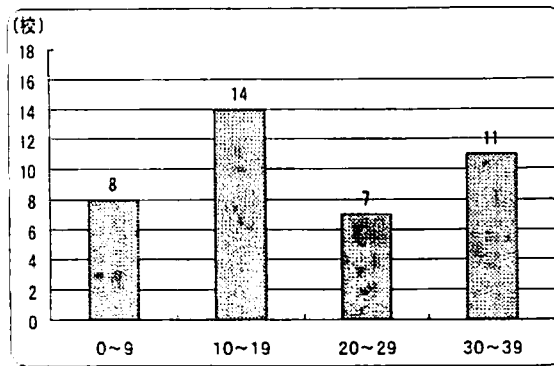
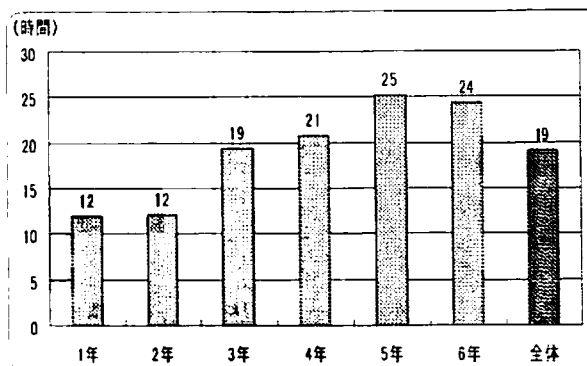


図3-1 ALTによる学年ごと年間指導時数(40校)

図3-2 ALTによる年間指導時数と学校数(40校)

- ALTによる年間指導時数は平均19時間である(図3-1)が、学校ごとにみても、10~19時間が14校と多く、次に30時間以上の学校が11校(図3-2)と多い。
- 0~9時間の学校も8校あり(図3-2)、又最低時数学校は5時間とかなり低いのに対して、最高時数学校は36時間と、学校間に差がある。
- 「ALTによる指導時数」の結果(図3-1、図3-2)は、「英語活動の時数」の結果(図2-1、図2-2)と似た傾向がみられ、ALTによる指導時間が英語活動の時間の中心となっていることがわかる。
- 学年ごとにALTによる平均時数(図3-1)をみると、やはり英語活動時数(図2-1)と似た傾向であり、低学年と中高学年の差がある。また、ALTによる指導が0時間の学年が3学年ある。

③ 指導者

約80%の担任が小学校での英語活動を肯定的に受け止めていると見られ、ALTと共に授業に関わりを持っている。授業での役目としては、ALTの補佐が半数を超えている現状において、指導法、教材教具、ALTの増加などを必要としているようである。

Q 小学校において英語活動を行うことについてどう思いますか。

Q 実際の授業に関わるのは、だれですか。

Q 英語活動で学級担任は、どんな役目をしますか。

Q あなたは英語指導に興味がありますか。

Q 英語活動をするにあたって、今必要としていることは何ですか。

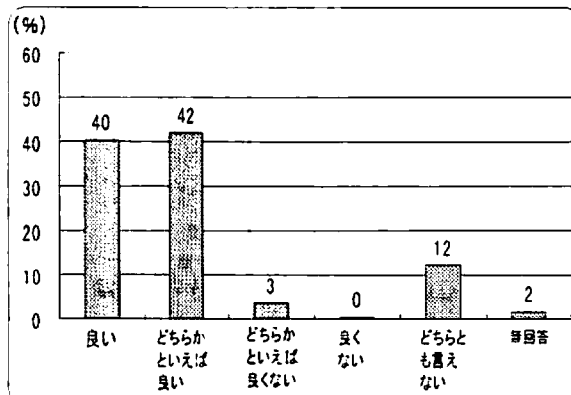


図4-1 英語活動をどう思うか(231人)

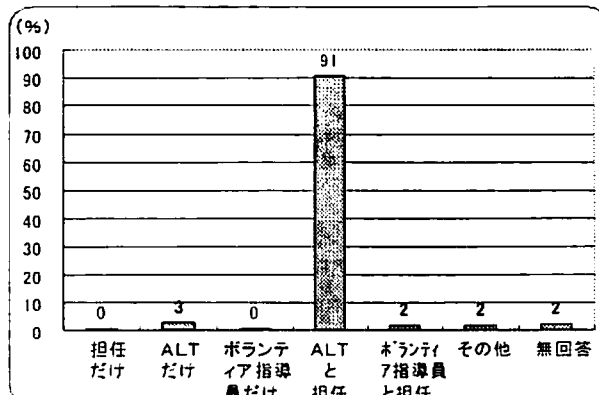


図4-2 英語活動指導者(231人)

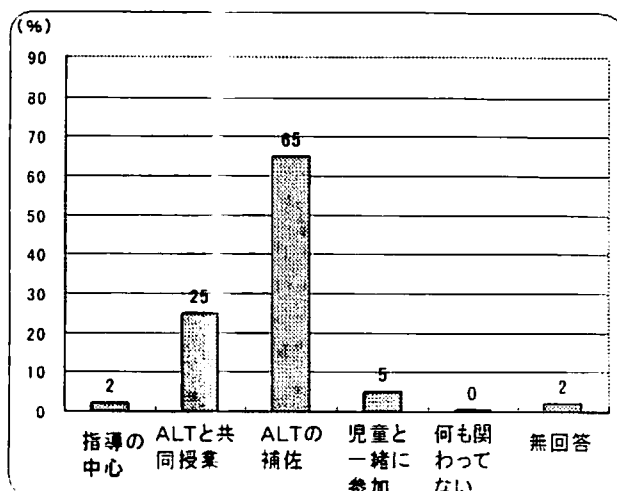


図 4-3 英語活動での担任の役割 (231 人)

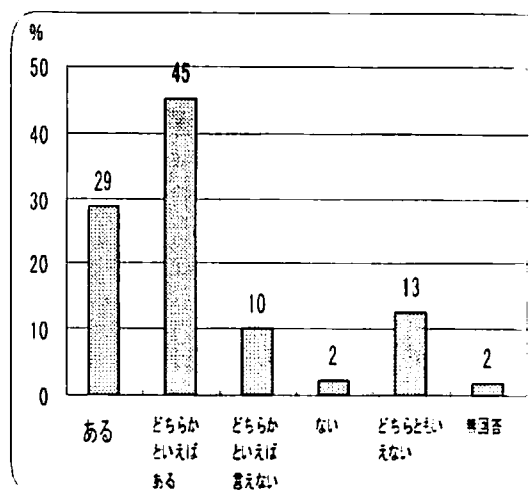


図 4-4 英語指導への興味 (231 人)

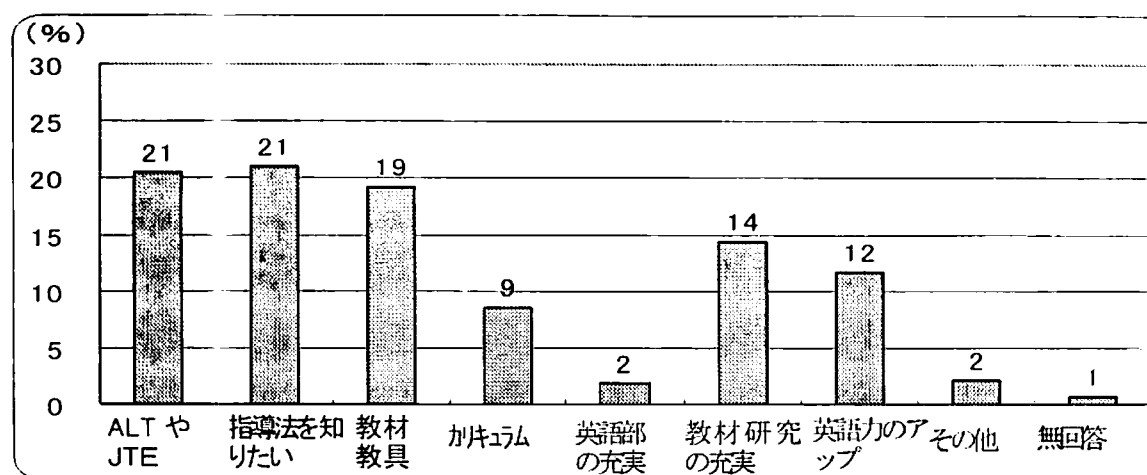


図 4-5 英語活動に必要なこと (複数回答 599)

○約 80%の担任が小学校での英語活動を肯定的に受け止めているとみられ (図 4-1)、小学校での英語が必要に迫られていると感じているようだ。また、実際に 91%もの担任が、ALT と共に授業に関わっていること (図 4-2) から読みとれる。

○授業での担任の役目はというと、ALT との共同授業をしている担任が 25%と積極的に関わっているが、ALT の補佐をしている担任が半数を超えている (図 4-3)。その現状から、約 75%の担任が英語指導へ興味を持っている傾向が見受けられる (図 4-4)。

○そのことは、英語活動に必要なこととして、ALT が欲しいと同じく、指導法を知りたい、教具・教材が欲しい、教材研究の時間が欲しいなど (図 4-5)、実際に授業で使えることを必要としていることにも表れている。

④ 活動内容・教材

活動内容はほとんどが、あいさつや歌、ゲーム、リズムなど聞く話すの音声指導が中心である。

Q あなたの学級では、どのような英語活動を行いますか。

Q 主に使用している英語教材は誰が制作したものです。

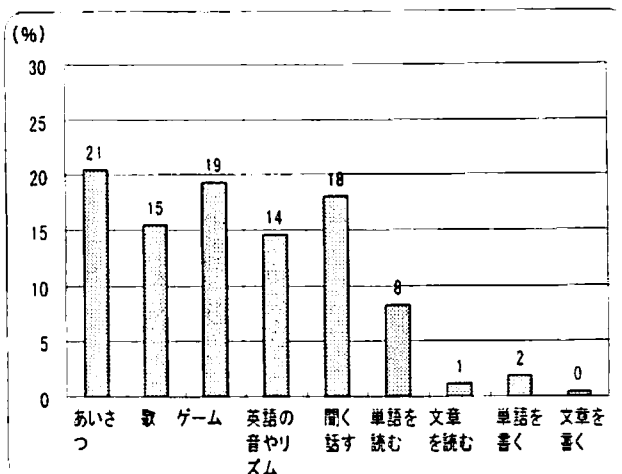


図5-1 英語活動内容（複数回答1090）

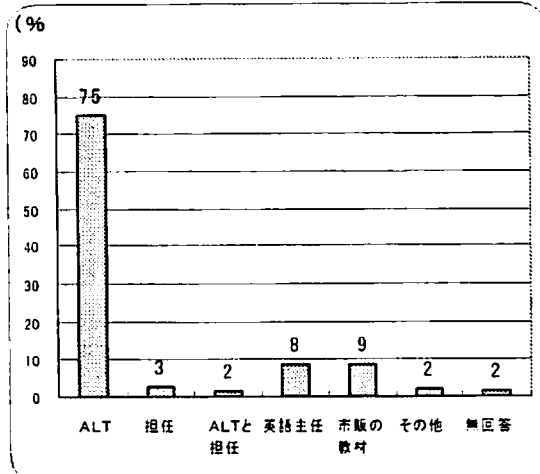


図5-3 英語教材制作者（複数回答289）

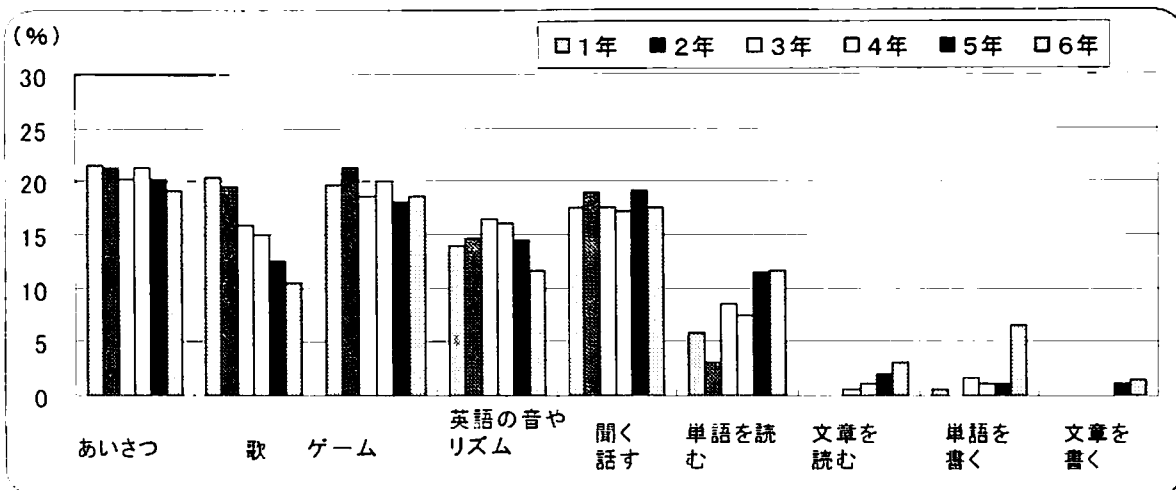


図5-2 学年別 英語活動内容（231人）

- 活動内容は、全体的にみても、あいさつ、歌、ゲーム、話す聞くなどの音声を中心である（図5-1）。中には、わずかではあるが、文章を読んだり、単語を書く、文章を書く活動（図5-1）をしているところもある。
- 学年別にみても、あいさつやゲーム、リズム、話す聞くは、どの学年でも均等に行われている（図5-2）ことから、日常生活に即したあいさつやゲームを中心とした話す聞く活動を、どの学年も重視していることがわかる。
- 高学年にいくにつれ、歌う活動が少し減り、逆に単語を読む活動が少し増えている（図5-2）。学年ごとに内容を多少変えるなど、子どもの発達段階を考慮している様子がうかがえる。
- また、扱う教材はほとんどの学校がALTの制作によるものであること（図5-3）から、内容をALTだけに任せている傾向がある。

⑤ 校内体制

管内の4分の1の学校が、指定研究校か校内研究に位置づけて取り組んでおり、その他の学校は、英語活動主任を中心に取り組んでいる。

Qあなたの学校では、英語活動を推進する校内体制はどうなっていますか。

Qあなたの学校では、英語に関する研修をやる予定がありますか。

Q研修をやるなら、どのような内容をやる予定ですか。

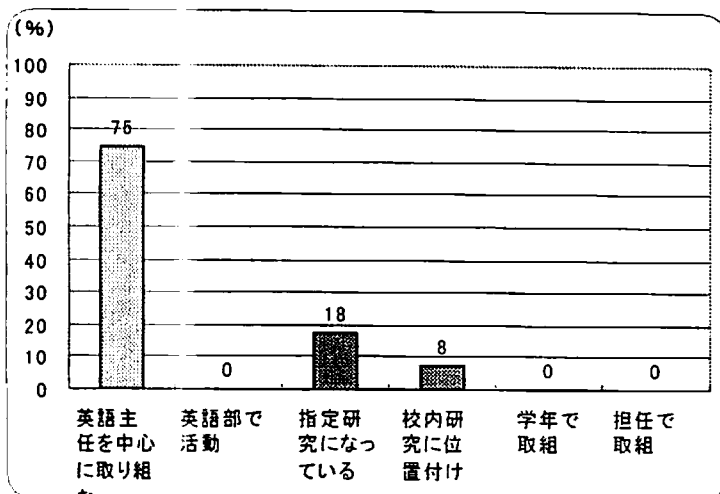


図 6-1 校内体制 (40 校)

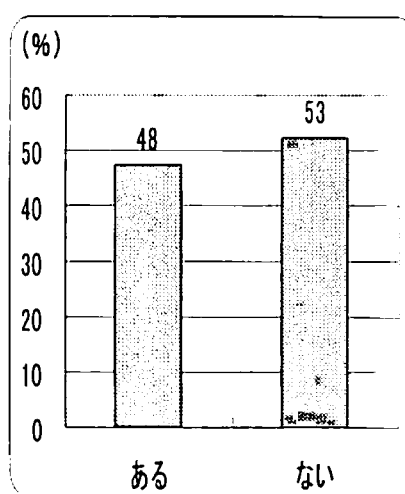


図 6-2 英語研修予定 (40 校)

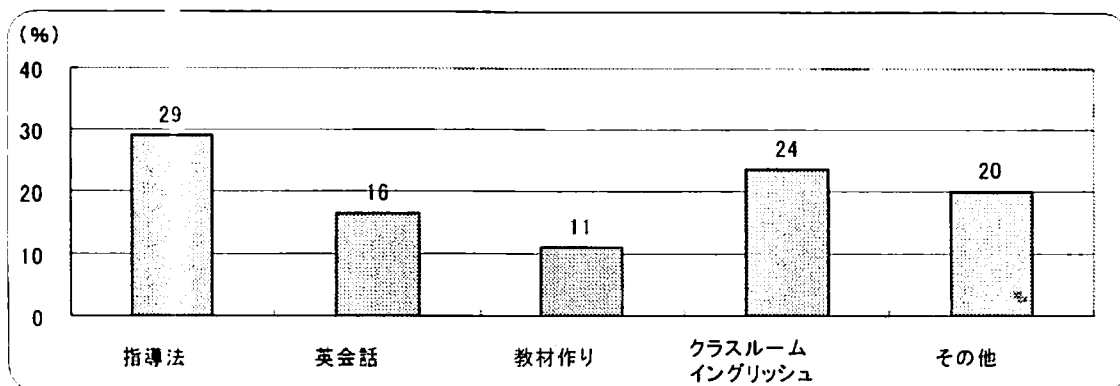
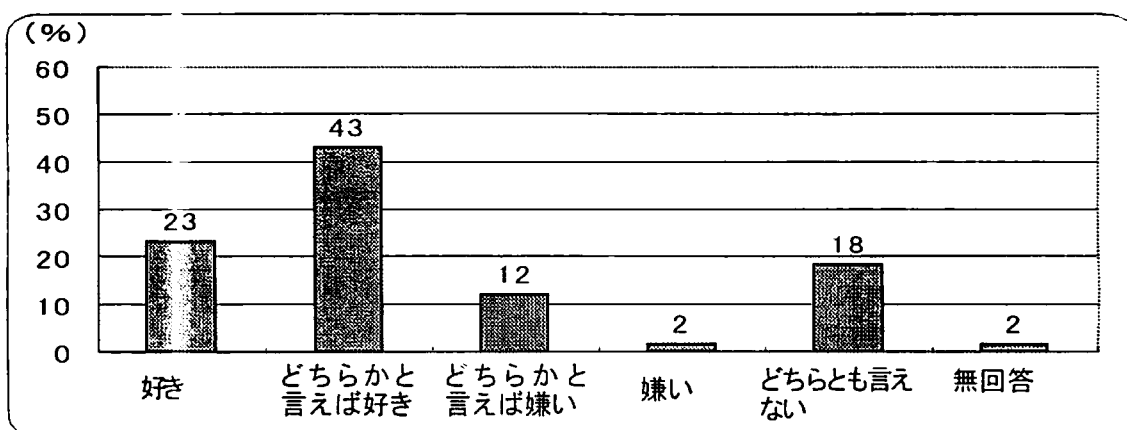


図 6-3 英語研修内容 (複数回答 131 人)

- 75%の学校が英語主任を中心に取り組んでいる (図 6-1)。指定校以外で、校内研に位置づけて取り組んでいる学校が 3 校ある (図 6-1)。
- 校内研修の予定がないと答えた学校が、あると答えた学校 48%を少しではあるが上回り (図 6-2)、英語研修への取組が不十分と考えられる。
- 校内研修予定内容は、指導法、クラスルームイングリッシュ (教室英語) に関することが多い (図 6-3)。その他の 20%には、授業研究会、T1、T2 の関わり方などがある。
- 校内研修への取組が充実することが望まれる。



資料 英語は好きか (231 人)

(3) 推進にむけて

今回の調査結果から、管内の小学校担任は、英語活動を肯定的に受け止めていることがわかった。実際には、担任はALTの補佐として授業に関わりを持っていることもわかった。

さらに、これからは、指導法の習得やカリキュラム、英語力の向上などを必要としていることから、校内研修の充実を図り、担任が授業へ積極的に関わりがもてるような授業づくりを提案する必要がある。また、各学校とも英語活動主任を中心に取組がなされているが、英語活動部としての取組は弱いことから、英語活動部を中心とした校内体制の充実に努めなければならない。

そこで、英語活動推進のための体制作りと授業作りについて、次の項から述べていく。

3 英語活動推進のための体制作り

(1) 校内体制

担任一人だけで取り組む英語活動より、全職員が関心を持って取り組む英語活動のほうがより効果的である。英語活動についてこれまで指導の経験がほとんど少ない教師が、英語活動に自信をもって取り組めるようになるためにも、校内体制を整えることが必要となってくる。

① 校内体制と役割

組織の中でも、英語活動部が中心となって、カリキュラムの提案や校内研修の充実を図ることが大切である。英語活動部の充実、強化が推進への大きな力となるのである。英語活動部がうまく機能するためにも、校長のリーダーシップが必要と考えられる。

以下に校内体制組織図の案（図7）と組織のそれぞれの主な役割を示す。

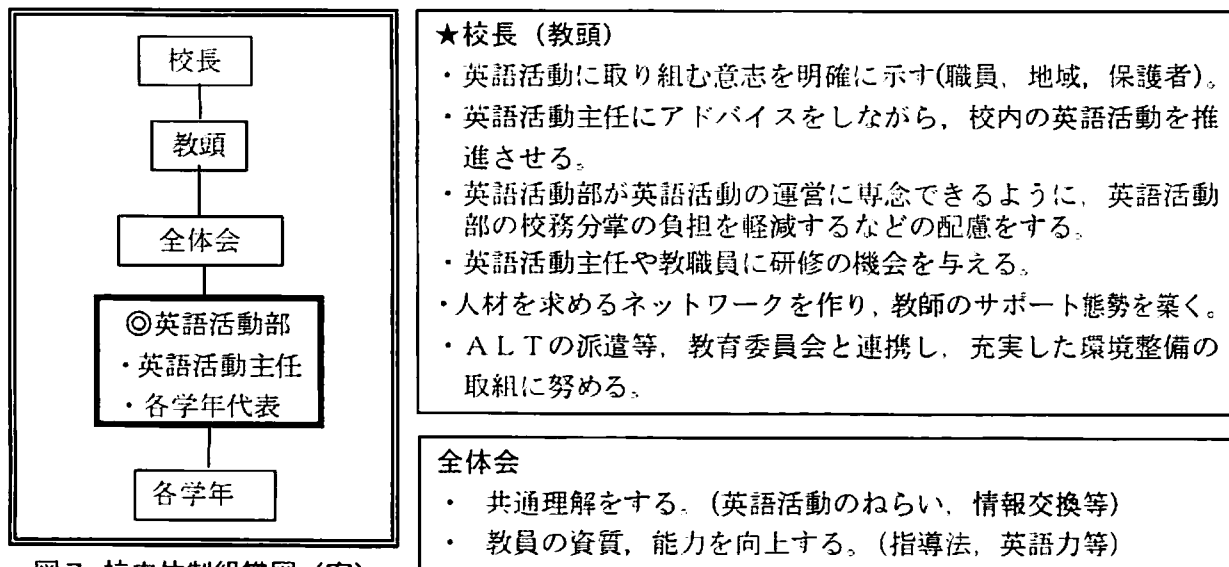


図7 校内体制組織図（案）

★英語活動部

- ・英語活動の推進役となる。
- ・全体会の企画、運営をする。
- ・年間指導計画、指導略案の作成をする。
 - ＊『小学校英語活動指導資料・実践事例「レインボープログラム」』平成15年沖縄県発行P39、41参照
 - ＊『小学校英語科年間指導計画』平成15年沖縄県教育庁義務教育課発行P2、P31参照
 - ＊『小学校英語活動実践の手引き』平成13文部科学省発行P69参照
- ・教材教具を準備する。
- ・ALTと連携を図る。
- ・各学年へ伝達をする（保護者への情報発信）。

★英語活動主任

- ・校内指導体制確立の立役者となる。
- ・校長、教頭と連携をとる。
- ・英語活動部の主導者となる。
- ・各研修へ参加し英語活動に意識を深める。（研究校の研究発表会への参加、実践校の授業参観等）
- ・全職員への伝達研修等を行い「英語活動」への気運を高める。

各学年

- ・英語活動へ積極的に取り組む。
- ・英語部からの資料を基に授業をする。

② 指導体制

組織の中の各部の役割を基に、いつ、誰が、どのように、役割を果たしていくか、連携をけつきり示す必要がある。また、授業充実、英語力向上のための研修内容を具体的にすることも大切である。表2に、連携のための指導体制と研修内容の案を示す。

表2 英語活動指導体制（案）と研修内容（案）

		指導体制内容		担当
授業までの流れ	学年開始前	I 作成 ・年間指導計画の作成、見直し、指導略案の作成		英語活動部
		II 提案＜校内研修＞ ・英語活動のねらい、あり方、年間指導計画、指導略案 ・授業の進め方（ALTと担任、担任のみ）		全体
		III ALTの受け入れ準備 ・職員への紹介（ALTを学校職員として迎え、積極的にコミュニケーションを図ろうとすることでALTと連携を深める。） ・ALTへのオリエンテーション：英語活動のねらい、年間指導計画、指導略案、年間スケジュール、学校の概要		英語活動部
	学年スタート	ALTとの連携		
		ALTとの連絡調整 ・前日に（Fax等で）指導学年とクラスの確認、授業内容		英語活動部
		ALTとの打合せ ・授業5分前内容確認		担任
		反省と確認 ・週に一回、授業の反省と次週の授業内容確認（歌、チャンツ、ゲーム、絵カードの読み万等を練習）		英語活動部
		次週の授業内容の確認（年間指導計画の活用）		各学年代表 担任
研修内容	英語力を高める	職員朝会	クラスルームイングリッシュ（3分程度）	全体
		校内研修	外部講師やALTとの研修（あいさつ、チャンツ、歌、クラスルームイングリッシュ等）	全体
		個人研修	英会話など	個人
	授業充実	校内研修	指導法研修（授業研究会、講師による実技、先進校の実践参考など）	全体
			情報交換	全体
		個人研修	夏季研修など	個人

③ 環境作り（雰囲気作り）

実際の授業となるとなかなか取り組みが難しい場合でも、学校全体として英語活動への雰囲気

気を作ることは、英語活動への取組の一步となる。子どもも教師も意欲的に楽しく英語活動に取り組めるように、いつでも目や耳で英語に触れることができる環境や雰囲気作りの例を示す。

表示の工夫
ドアや玄関などに、英語のプレートを掲げてみる。

ブレイルーム（オープンスペース）、掲示板等の活用
子どもがいつでも英語に触れることができるように、英語に関する雰囲気を感じさせる場作りや掲示をするとよい。

英語活動専用の教室
机や椅子のない部屋を一室用意し、英語活動の時間に使えると望ましい。

教材室
英語活動専用の教室か職員室に、教材・教具を整えておき共有できるとよい。

校内放送の活用
・校内放送の「朝と帰りの放送」を、英語と日本語で言ってみる。
・学校独自の「〇〇〇〇タイム」などを設け、お昼の校内放送で流してみる。

(2) 英語活動にのぞむ担任の姿勢

英語を使って「たとえ流暢でなくても、積極的にコミュニケーションを図ろうとするモデルである」という姿勢でのぞむほうがよい。

英語活動は、異文化に興味を持って、積極的にコミュニケーションを図りたいという気持ちを育てることがねらいである。つまり、言語習得が主な目的ではなく、興味・関心や意欲の育成をねらうものである。

英語を教える指導者というより、子どもと一緒に英語に触れ楽しむ支援者（一緒に学ぶ者）としての役割を果たすことが大事である。担任が進んで英語を使おうとしている姿をみせることで、児童も積極的に英語活動に取り組むようになる。

① 英語活動で行われる英語について

発音に神経質になりすぎず、相手の話を一生懸命聞こう、心を込めて一生懸命話そうとする姿勢でのぞみ、子ども達にもその態度を身につけさせることが大事である。

担任が英語活動に消極的な原因の一つとして「うまく発音できない」があげられると思うが、英語は国際語でありいろいろな発音やアクセントがあつて当然である（塚田庸子（2006））。

現に今、世界でネイティブ以外の英語が占める割合が増え、いろいろな国で英語が使われている。

② 担任だからできること

学級担任は教えることのプロであるといえる。多くの教科の教材研究をこなしてきている担任だからこそ、新鮮な発想や教材・教具をもって、英語活動の教材研究もできるのである。

英語活動で扱われる英語は子どもの日常に関する簡単な表現である。ゆえに、担任が英語ができるかが問われるのではなく、学習者ができるように、教材研究、指導法を工夫できるかが肝心である。

子どもの実態をよく把握している担任だからこそいい授業作りができ、また担任だからこそ各教科との関連を図ることなどの工夫もできるのである。そのためにも、前項で触れた、ねらい、指導法の研修がもたれるべきである。

できることから始めようという気持ちで、10分でも20分でもいいからとにかくやってみる。その経験の積み重ねが教師の自信の芽生えにつながる（影浦攻（2006））。

4 英語活動推進のための授業づくり

(1) 英語活動の内容

小学校の英語活動においては、子どもの日常生活の中の身近で簡単な英語を扱い、聞いたり話したりする音声中心の活動を楽しみの中で慣れ親しむことができるように行う。

国際理解に関する学習の一環としての英語活動の趣旨（ア 外国語に触れる イ 外国の生活や文化などに慣れ親しむ）をふまえ、英語活動の内容についてまとめる。

文部科学省『英語活動の手引き』では、「英語活動で取り扱う具体的内容はさだめられておらず、教師の創意工夫することが求められている。ただ、中学校の学習内容を先取りするようなことは避けなければならない。」とされており、英語活動の趣旨を教師がはっきりとらえ、活動内容を選択していかなければならない。

① 音声を中心とした活動を行うことについて

英語活動を行う際は、英語をたづねたり聞いたり、話したりすることによって英語の音声に慣れ親しむことが大切である。

コミュニケーションは、主に音声と文字を媒体として行われる。しかし、英語の文字と音声と同時に媒体として意志の伝達を図ろうとすることは、小学校の子どもにとって、負担が大きすぎて英語嫌いを生み出すことにつながる。音声に慣れ親しませることによって、子どもが英語でのコミュニケーションに興味を持つことが大事である。

英語を聞き、英語で何かを表現できる「英語で相手に通じてうれしかった。」という満足感から、子どもがいつまでも「英語が好きだ」という気持ちを持ち続けるようにするのである。

② 楽しさの中で英語に慣れ親しむことについて

「総合的な学習の時間」の一環としての英語活動を考えると、英語活動は体験的な活動、つまり実際の体験や疑似体験を通して、英語に慣れ親しんでいくような配慮が必要である。

音声を中心とした活動であるということは、活動を終えた後に目で見える形での英語は残らないということである。それで、体を動かす、存分に楽しい活動とすることが大切で、「遊びの要素」などを取り入れた体験的な活動としなければならない。

また、子どもの発達段階を踏まえ、言語材料は同じでも学年が上がれば活動のルールを少し複雑にしたりなど、子どもが満足できる場を作る必要がある。

さらに、グローバルな視点を取り入れることが一つの大きなポイントで、英語に慣れ親しむ活動と、さほど英語使用にこだわらない調べ学習や、交流活動などを関連させ、授業内容を考えるようにする。

③ 身近で簡単な英語を扱うことについて

異文化への興味・関心を高めることができ、コミュニケーションを図る楽しさを味わうことができる、身近な材料を取り上げることが大切である。また、子どもの思いや好奇心を、発達段階に応じて取り上げることや、他教科との関連を図った内容を取り上げることも大事である。

言語は子どもの日常生活の中で使われるものであり、子どもが最も興味を抱く生活場面に位置づけることが望ましい。

初めて英語に触れる場合でも、中学年と高学年とでは、子どもたちの英語に立ち向かう態度や異文化に対する心理的な距離感が違うため、子どもの発達段階を踏まえ、使用する語句を変えたりしながら、適切な素材を選択することが大事である。

英語活動の内容をまとめてみると、以下の図8のようになる。

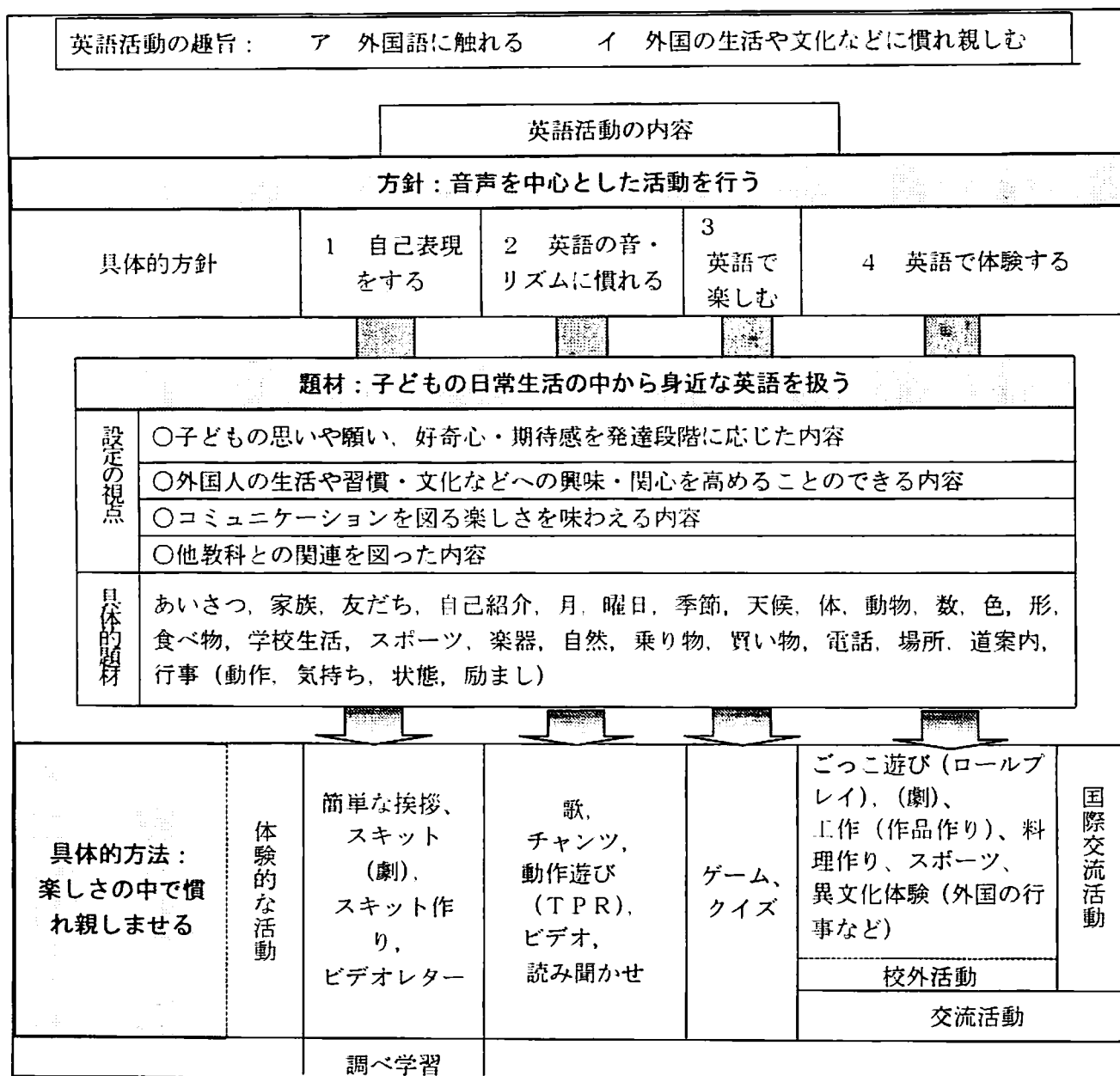


図 8 英語活動内容

(2) 授業の進め方

1 時間の授業の構成を練る時、教師が配慮しなければならない様々な条件がある。授業構成の主な条件を挙げて、授業作りに当たって配慮すべき点について検討していくこととする。授業をする人によって、また、使う教材・教具、さらに、授業をする時間と回数等によって授業の組み立て方は変わってくる。

① 指導形態

英語活動の指導形態について指導者の観点から見ると、以下（表 3）のように分けられる。

表 3 英語活動授業形態（『小学校英語活動実践の手引き』参照）

授業の形態	指導者
ティーム・ ティーチング	外国語指導助手（ALT）又は日本人英語教師（JTE）と学級担任（HRT）によるもの
	学級担任同士によるもの ・ 同一学年の学級担任同士（同一学年複数クラス合同の授業の場合） ・ 異学年の組み合わせの学級担任同士・全職員によるもの（全校英語活動の場合）
単独の授業	学級担任

② ティーム・ティーチングのあり方

ティーム・ティーチングについて以下（表４）にまとめる。

表４ ティーム・ティーチングの特徴と指導者の役割

（『小学校英語活動指導資料・実践例「レインボープログラム」』参考）

特徴		
・複数の指導者が指導上の役割を分担することによって、授業の展開や活動の支援を多様に進められる。 ・授業中の支援も個別指導やグループ指導など、より細かなものになる。 ・指導者同士のコミュニケーションや協力の様子から、子どもは多くのことを学ぶことができる。 ・授業を行う前に、授業内容や方法について確認をする必要がある。		
	指導者の役割	A L T（J T E）と担任の事前確認事項
J A T L E T	・英語活動づくりの提案やアドバイス ・発音や文などのモデルを示すなどの英語指導 ・共に活動を楽しむ ・英語による児童の称賛 ・活動意欲向上のための言葉かけ	○始めのあいさつの声かけを、どのようにするか。 ○歌は何か。 ○本時の活動の内容や方法はどうか。
学級 担任	・授業の進行やクラスコントロール（英語活動の意欲付け、雰囲気づくり、基本的な学習態度の定着支援） ・ゲームの説明や指示を補足 ・A L Tとのデモンストレーションの実施 ・児童への支援（励まし、称賛） ・A L Tへの積極的な働きかけの促進	○A L Tと担任の役割分担はどうか。 ○A L Tの考えややりたいことは何か。

③ 単独授業のあり方

授業時間枠別単独授業について以下（表５）にまとめる。

表５ 単独授業の種類（『小学校英語活動実践の手引き』参考）

特徴・自分のクラスに合わせて授業計画を立てることができる。			
＜授業の１単位時間の弾力的運用可＞			
新学習指導要領では、授業の１単位時間は、子どもの発達段階や学習活動の特質を考慮して一層弾力的に運用できるようになった。一つの方法だけにこだわらず、いろいろな試みが考えられる。			
授業時間枠の設定		授業の１単位時間の長さ	週当たり授業回数
ア	45分授業	45分	週１回
イ	ショート・タイムの活動	5分から10分	週のうち3日から毎日
		20分から25分	週２回
ウ	ロング・タイムの活動	45分から90分	週１回から２週に１回

ア 45分授業

年間の授業の中には、学級担任が一人で授業をしなければならないことがある。英語活動は、「総合的な学習の時間」として行われることから、基本的には学級担任を中心に進められることが必要である。さらなる英語活動の推進に向けて、学級担任の積極的な授業への関わりが重要である。

具体的には、教師は、本時の中心のねらいを明確にし、どこで、何を、どのようにするのかを考えていく必要がある。そこで、授業に入る前にしっかりと英語活動の組み立てをし、基本的な学習の流れに沿って授業を進めていくことが大事である。以下に、組み立て方と基本的な学習の流れ、それを基にした授業作りの一例を示す。

■ 英語活動の組み立て方

英語活動の組み立て方	参考にするもの	一例(3, 4 年生開始時期)
① 児童の実態・ニーズをつかむ ＜英語活動内容の項＞	学校の年間指導計画をみる。 (または、文部科学省発行『小学校英語活動実践の手引き』P 7～P 13、沖縄県教育庁義務教育課発行『小学校英語活動指導資料・実践事例「レインボープログラム」』P 16～19を参考に作る。)	●動物に興味・関心がある(ニーズ)。 ●数について日頃から英語で聞き慣れている(実態)。
② 内容を決定する ＜英語活動内容の題材の項＞(あいさつ、家族、友だち、自己紹介、体、動物、数、……………)		●動物 ●数
③ 主となる会話文(コミュニケーションできるもの)を組み立てる ＜英語活動内容の項＞		●What is this? It's a lion. ● I have two legs.
④ 意欲的に英語が使えるような活動(体験させたい活動)を考える ＜英語活動内容の方法の項＞ (歌、ゲーム、クイズ、チャンツ、動作遊び(TPR)……………)	文部科学省発行『小学校英語活動実践の手引き』P39～P 43を参考に作る。	●歌 ●チャンツ ●クイズ ・フラッシュ・カードの絵を使って質問し答えさせる。 ・動物の足の数を言って、動物名を当てるクイズをする ●ゲーム ・英語でたしざん
CD、テープ、視聴覚教材(VTR、DVDなど)、コンピュータ教材(CD-ROM教材など)、放送番組(TVエイゴリアンなど)の活用によって、「音声を中心とした活動」を取り入れることができる。 (参考)ゲームのねらいは、話す・聞く活動を楽しむこと。ゲームによって、聞く学習を作らないといけない。ゲームしているようで楽しいが、しっかりと話す・聞くの英語活動にしなければならない。		
⑤ メイン活動を組み立てる ○導入(Presentation:紹介) ○練習(Practice:練習) ○使う(Produce:作る)	「授業の展開例」のメイン活動をつくる。	●導入 ・子どもに好きな動物の絵を描かせておき(*子どもの必要感を考慮)、それに対する質問と答え方でデモンストレーションをみせる。 ●練習 ・チャンツで動物名の練習をする。 ・質問と答え方の練習をする。 ・クイズで英語の動物名に慣れる。(※同じ表現を違った活動であることを考慮する。授業のウォーム・アップでも違った活動でやる。) ●使う ・クイズで英語の動物名や数字に慣れる。
メイン活動組み立て(英語活動設定)の基本 *「子どもの必要感」 英語を使ったりいろいろな活動を考えるときの基本は、子どもが英語を話す必要感にある。つまり、子どもがどうしても英語を話したくなるような、話さざるを得なくなるような状況を設定していく。英語を使う場面を仕組む。「こんな英語を話したい。」という必要感が、「もっとこんな英語が言えたらいいなあ。」という更なる必要感を生むような活動設定や展開の工夫をしていく必要がある。 *同じ表現を違った活動で 自然と英語に慣れ親しむには、同じ言葉に何度も出会い繰り返し発話する経験が大切である。そこで同じ表現を用いた異なる活動をいくつか組み合わせる。時間がかからずルールが複雑でないものがよく、1時間に行うゲームなどの数は、だいたい2～3つが適当である。 *学習経験 2年目以降学習を重ねるにつれて学習が蓄積されていくので、各学年の学習活動方法はかえなければならない。2年目以降の学年には、1年前と同じ活動を行うことは不適當と考えられる。		

■ 1時間の基本的な学習の流れ

過程	内容	学習活動	教師の支援	一例(3, 4年生開始時期)	留意点
① ウォーム・アップ	あいさつ	始めのあいさつをする	・朝のあいさつをする(文部科学省発行『小学校英語活動実践の手引き』P61, P62参考) ・体調の確認をする ・自然と英語が出てくるような場面作りをする	(3分) Hi, everyone. Good moning/afternoon. How are you? Fine, thank you. And you? Fine, thanks	*教室英語をなるべく使う ①逐一日本語に訳さない ②英語の発音をカタカナに置き換えない ③無理に覚えさせない ④誤りは細かく訂正しない (間違ってもいいという雰囲気づくり) ⑤いろいろな学習形態の工夫(形態の工夫。個人、ペア、グループ) ⑥子どもの発音をほめる
	歌	歌を歌い、天気や月日を言う(身近な題材について、簡単な質問などをする)(簡単なゲームなどをする)	・今月の歌を歌う(文部科学省発行『小学校英語活動実践の手引き』P39～P43参考) ・雰囲気作りをする (・1語で答えられるような簡単な質問をし、英語を使う雰囲気に慣れさせる)	(3分) Hello Song, Good Morning/Afternoon Song, Head And Shoulders, London Bridge などから選ぶ<CD活用> (5分) (a)フラッシュ・カードの絵を使って What is this? Lion. [グループ指名もする] (b)色のカードを用意して What color is this? Blue. [個人指名もする] (c)ゲーム: Touch your shoulders. Touch your hand.	
	復習	前時の復習をする		数の復習(12分) (a)身近なものを英語で数える。 (b)歌を歌う。(Ten Little Indian Boys) <CD活用> (c)1から5までの数字を書いたカードを1人1枚配り、歌を歌いながら教室を歩き回り、歌が終わったところで2人ペアを作る。2人のカードの数を加えて、1番数の多いペア、少ないペアなどをみ見つける。(1 and 3 is 4. 2 and 5 is 7.) <CD活用>	
② メイン活動 本時の指導内容の導入と発展	導入	今日の活動を確認する	(・ゲーム的な方法で、本時に取り上げる指導内容を導入する) ・デモンストレーションを見る(英語の得意な児童と行う) ・ゲームのルールを知る	どうぶつの名前、数の発展(12分) ●導入 ①自分が好きな動物を前もって書かせておく。 (dog, cat, , kangaroo, lion, chimpanzee, , elephant, etc) ②描いた絵についての質問と答えのデモンストレーションを見る。(What is this? Lion.) ●練習 ③黒板に子どもが描いた絵を貼りだし、動物名をリズムカルに言う。<チャンツ> ④ペア、グループで質問と答える練習をする。 [代表で3ペア前に出てさせる] ⑤子どもたちがかいた動物の体色を先生が英語で言い、子どもに動物の名前を英語で言わせる。 (The color is brown. It's a kangaroo. The color is gray. It's an elephant . etc)[グループ指名、個人指名もする] ●使う ⑥ヒントに動物の足の数を加えて、動物名を当てるゲームをする。動物名を増やす。 (The color is white. I have two legs. Who am I? It's a bird.) (monkey, gorilla, horse, snake, swan, etc)	
	練習				
	使う	活動に取り組む	文部科学省発行『小学校英語活動実践の手引き』P39～P43参考		
③ 授業のまとめ ふりかえり	まとめ	活動のまとめをする	・今日の活動を振り返る ・自己評価をする	数の歌(5分) Five Little Monkeys<CD活用>	
		次時の学習内容を確かめる	・次時への意欲を高める		
		終わりのあいさつをする	・歌などで気分整え、終わりのあいさつをする	(5分) Good-Bye Song	

イ ショート・タイムの活動

英語に触れる時間が長ければ長いほど英語を使うことに慣れ、自信を持って表現することを楽しめるとの考えもあるが、必ずしもすべての学校で多くの時間が確保されるものではない。

45分授業という一つの方法だけにこだわらず、いろいろな試みが考えられる。以下にショート・タイムの種類についてまとめる（表6）。

表6 ショート・タイムの種類（『小学校英語活動実践の手引き』参考）

特徴		
一回の時間はわずかだが、継続活動により、より多くの英語に触れさせる機会になっている。また、初めての英語の授業に抵抗を覚えるHRTや、最初から45分の授業に抵抗がありなかなか取り組むことが出来ないHRTでも、ショート・タイムでの活動なら英語活動へ取り組みやすく、学校全体として一斉に取り組むとなお英語活動への雰囲気も高まる。		
活動（例）	活動（例）の特徴	活動の内容
校内放送（名称を付けるとよい。） （給食の前後の時間など）	全校的活動を共有することで、各教室の子ども参加することができ、一体感が生まれ、英語学習への意欲をより高める。	・生放送かビデオ放映。 ・内容はオリジナル教材（ALTと英語教師によるスキットやゲーム、歌、チャンツ等）又は、市販のビデオや放送番組
朝の会		ビデオを見せたりする。
朝に15分のショート・タイムの活動	・中学年では、子どもの集中力の持続という点で、45分の授業を週1回行うより、20分～25分の授業を週2回実施したほうが有効だという報告もある。	45分授業の準備段階と位置付け、ゲームで使う表現に親しむことを目的とする。

ウ ロング・タイムの活動

45分の授業では十分な活動を行えないことがあるときには、ロング・タイムとして長時間での活動となる。以下にロング・タイムでの活動例についてまとめる（表7）。

表7 ロング・タイムの活動の種類（『小学校英語活動実践の手引き』参考）

活動（例）	活動（例）のやり方	注意事項	具体例
文化を紹介する。	日本の地域伝統文化を紹介したり、逆に外国の伝統や習慣等を教えてもらうことができる。	実際に動きを伴うものが適当である。	羽子板、お茶、名所紹介、折り紙
行事を体験する。	①行事に関する話を聞く。 ②日本の行事との違いを知り、自分たちの行事について話す。 ③行事に関する歌やゲームを教えてもらい、実際にやってみる。 ④行事を体験する。	視覚に訴える映像や資料が入手できれば、効果は大きい。 制作活動を取り入れるのもおもしろい。	七夕、節分、ハロウィーンパーティ、クリスマス、イースター、ALTの国のスポーツや料理、お楽しみ会、誕生会
交流活動をする。	クラス単位、学年単位、全校集会	形態を工夫して、できるだけ、少人数での触れ合いの経験を持つことができるようにする必要がある。	直接の交流（国際交流、校外活動、ボランティアの活用）、間接交流（ビデオレター等）

調べ活動 (子ども同士で情報交換をすることや、憶測を排除することなどがねらい。)	各教科で学習した国や交流を予定している国について調べたり、あるテーマについて各国の事情を調べる。 図書館、インターネットの活用	発達段階に応じて情報収集の方法や内容を考える。	
こうした活動(調べ学習)を通して、子どもたちが、世界には様々な文化があり、それらが相互に影響を受けながら変化していることを知ることは大きな意義ある。 これらは、環境、情報、福祉・健康などの現代的諸課題につながっていくものであり、「総合的な学習の時間」における他の学習活動や各教科との関連を意識していくことが求められる。			

IV 研究の成果と課題

(1) 成果

- 管内の小学校英語活動の実施状況と教師の意識について知ることができ、英語活動推進にあたっての課題が明らかになり、推進に向けての具体策がみえた。

<実態からみえた成果>

- 学校間に差はあるものの、年間平均 21 時間、英語活動に取り組んでいることがわかった。
- 約 80% の教師が英語活動を肯定的に受け止め、ALT と共に授業に関わりを持っていることがわかった。
- あいさつ、歌、ゲームなど音声中心の授業を行っていることがわかった。

(2) 課題

<研究の課題>

- アンケートの校内体制に関する項目の回答を、各校一人にするべきであった。
- アンケートの 100% 回収をするべきであった。

<管内の調査からみた課題>

- 英語活動部を中心とした校内体制の強化と校内研修の充実を図る必要がある。
- 英語活動指導法が必要とされており、校内研修を充実させる必要がある。
- 実際の学校において、カリキュラム作成に取り組む時間の確保が必要である。
- 教材・教具の確保が必要である。
- ALT などの派遣回数の確保、ALT との連携、時間の確保が必要である。

<主な参考文献>

文部科学省	『小学校英語活動実践の手引き』	開隆堂出版株式会社	2001 年
沖縄県教育庁義務教育課	『小学校英語活動指導資料・実践例「レインボープログラム」』		2004 年
那覇市教育委員会	『研究開発実施報告書 3 年次』		2005 年
塚田庸子	“英語活動を充実させる指導のポイントの検討「計画」をどう見直したいか” 小学校英語セミナー(20) 18-19		2006 年
影浦攻	“英語活動充実の具体策を提案する” 小学校英語セミナー(20) 10-11		2006 年